

安威遺跡・安威城跡発掘調査概要

主要地方道茨木龜岡線道路整備工事に伴う調査

2006年3月

大阪府教育委員会



はじめに

京都府亀岡市に源を発する安威川が大阪府茨木市の山間部をぬけ三島平野に達する。川沿いには史跡・建造物・石造物など、多くの文化財が残っているとともに、併行して主要地方道茨木亀岡線という道路がはしる。その道路の改良・整備工事に伴って、本府教育委員会は平成9年度より発掘調査を実施しているところである。平成16年度は道路が山地から平野にぬける段丘崖沿いに安威城跡と、さらに東西方向の谷をはさんだ南側、平野側の段丘上に広がる安威遺跡について発掘調査を実施した。

安威城跡の調査は、東西方向の埋没谷を中心に弥生時代から奈良時代の遺構が存在し、安威遺跡では5世紀後半を中心とする古墳時代の遺物などが確認できた。後者は、それまでの調査で検出している微高地にのる竪穴住居群の北限にあたる様相を示すものである。この住居は安威川をはさんで同様な時期に築造された縦体陵古墳が存在することからもその関係が注目されるところである。さらに双方の遺跡にまたがって、弥生時代から古墳時代の過渡期である庄内期前後の遺構・遺物がまんべんなく確認でき、その分布範囲は南北600m以上に及ぶ。昭和23年以降の調査成果を重ねると、南北1kmの長さの集落域を想定できるようになった。

安威遺跡周辺の道路整備は終了しつつある。本調査に見られるような弥生時代末から古墳時代にかけて広がる集落は、平野部に水を供給する安威川の流域の付け根と言うべきところにもなる。この時期に限らず、この地域は平野灌漑の歴史背景を考える上で的重要性をもつ。今後、調査が周辺域に広がることでより鮮明な具体像を描くことが可能となることを期待したい。

調査にあたっては、茨木市教育委員会、安威川ダム建設事務所、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々にご協力いただいた。深く感謝するとともに、今後ともこの地における文化財保護行政にご理解、ご協力をお願いするとともに、上記のような歴史的環境を地域に生かすことで保護・保全・活用に向かうようお願いする次第である。

平成18年 3月

大阪府教育委員会文化財保護課長

丹上 務

例言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府土木部の依頼を受け、安威川ダム建設事業のうち主要地方道茨木龜岡線道路整備工事予定地について平成16年度に実施した茨木市東安威地内所住の安威遺跡・安威城跡の発掘調査の概要報告書である。調査番号は04047である。
2. 調査は、文化財保護課 調査第一グループ 総括主査 岩崎二郎、主査 一瀬和夫が担当した。
3. 調査に要した経費は、大阪府土木部が負担した。
4. 調査の実施にあたっては、茨木市教育委員会、大阪府土木部、安威川ダム建設事務所をはじめとする諸機関、関係諸氏の協力を得た。
5. 本書の編集は、一瀬が担当し、執筆は調査担当者の他、参加者が分担した。
6. 本書に掲載した遺構の一部及び遺物写真的撮影は、有限会社 阿南写真工房に委託した。
7. 本概報は、300部を作成し、一部あたりの単価は746円である。

目次

はしがき

例言

目次

第1章 調査に至る経過	3
第2章 土層層序	5
第1節 16-1区 安威遺跡	5
第2節 16-2区 安威城跡	6
第3章 検出遺構	13
第1節 16-1区 安威遺跡	13
第2節 16-2区 安威城跡	15
第4章 出土遺物	25
第5章 まとめ	27

写真図版

報告書抄録

安威遺跡・安威城跡発掘調査概要

主要地方道茨木亀岡線道路整備工事に伴う調査

第1章 調査に至る経過

京都府亀岡市から大阪府茨木市に通じる主要地方道 茨木亀岡線は、旧本線をおよそ倍の幅にして改良・整備工事を実施している。そのうち、新たに道路として拡幅される部分については用地の全面発掘調査を行い、すでに共用している旧本線部分は地下埋設物・構造物で遺跡に損壊を与える部分を中心に調査を行ってきた。これまで平成9・10年度に茨木市安威遺跡の西側道路新設部分の全面発掘調査（注1）、平成13・14年度に耳原遺跡の道路新設部分の全面発掘調査（注



図1 調査対象地位置図

2)、平成 15 年度には平成 9 年度南側の東、本線部分の埋管設置部分を中心とした調査を本府教育委員会 技師 宮崎泰史を担当者として実施した（注 3）。一方、北側にある安威城跡の北方の拡幅部分を本府教育委員会 主査 泉本智秀が試掘調査を実施した（注 4）。

平成 16 年度については、茨木市東安威 1・2 丁目西端に、南北に走る道路の東側、旧本線部分の 2448 m² の対象地のうち、埋管等構造物の掘削が遺物包含層まで掘削が達する部分を幅 2.0 m を中心として発掘調査を行った。

南側の 16-1 区は南北に約 123 m の長さで、南向きに 1.1 m 低くなる。北側の 16-2 区は約 207 m であり、同様な勾配で 1.6 m の差がある。

前者は安威遺跡の北東端に位置し、南側は平成 9・10 年度調査で古墳時代堅穴住居群を検出した北端にあたる（注 1）。平成 15 年度調査でも須恵器などの古墳時代遺物の出土があった（注 3）。ちょうどそこからは、安威川をはさみ、東側に縦体陵古墳が存在するという環境をもつ。

後者は平成 15 年度の試掘調査において古墳～平安時代の包含層が認められたことから（注 4）、安威城跡の遺跡範囲を段丘端に沿い拡大した部分にあたり、安威寺跡と近接するとともに尾根稜線上を中心に安威古墳群の古墳が群在する丘陵麓にあたる。

（一瀬）

（注 1）大阪府教育委員会 2000『安威遺跡』

（注 2）財團法人 大阪府文化財センター 2003『日原遺跡』

（注 3）平成 15 年度の安威遺跡の調査は 84 m² の面積で実施し、地表下、路盤厚 0.6 m、盛土厚 0.3m、その下に南半部では T.P.21.7 ~ 22.0m の間で、砂を多く含むにぶい黄色砂質土の中世包含層が確認できた。さらにその下は黄褐色・灰オリーブ色・灰黃褐色砂質土が層をなす。遺構はピット、落込み、土坑、溝を検出した。出土遺物は本書の図版 6 右下 7 ~ 12、5 個体分を示しており、須恵器杯身、土師器小形壺がある（調査番号 03030）。

（注 4）この調査では、北側に道路に直交した 5 × 1 m の東西方向のトレーナーを 6 箇所設定し、南側で 2 × 2 m のトレーナーを丘陵麓にあけ、西からの地山の斜面を検出し、その東に包含層が認められた（調査番号 03051）。

第2章 土層層序

第1節 16-1区 安威遺跡

南側の16-1区は南北に約123m、東西2mの細長いトレンチで北から南に向けて徐々に低くなっており、層序についても2ヶ所の地図替わりにおいて大きく変化しており、南端よりNo.46から北へ12mのラインまでを16-1-a区、これよりNo.49までを16-1-b区、さらにこれより調査区北端までを16-1-c区として、以下に記述していく。

この区の基本層序はまず、道路盛土下に灰色シルトの旧耕土が残り、下層は残存に差があるものの中・近世の黄色粘土系、その下の上面では古代、下面では古墳時代後半期の灰褐色シルト、弥生時代後期～布留期の黒味のある砂礫層、そして地山の灰色礫層となる。下半は中央部にある谷からむしろ高所側にあたる北へ下降する。そのため、南端は微高地の北側にあたり黒味がかかる砂礫層が削平気味で、5世紀後半を中心とする古墳時代の遺物がすぐに確認できるが、北へ向うと削平をまぬがれた古代・中世の土層をはさむことになる。(一瀬)

16-1-a区 (No.44～No.46から北へ12m区間)

0 道路路盤及び盛土

I 灰色シルト層 旧耕土である。遺物も土師器・須恵器片の他、近代の瓦、陶磁器などが含まれる。層厚は0.10～0.15mを測る。No.45～46の間で厚くなり、0.20～0.30mを測る。

II 褐色シルト層 (マンガン粒を多く含む) 9世紀頃と思われる壇高台部分の土師器片を数点含む。かなりの削平を受け、この層の下層にあたる礫層のくぼみに堆積した部分が残っている他はごく薄く残る。層厚は0.05～0.10mを測る。

III 灰褐色シルト～細砂に礫を多量に含む層 5世紀後半～6世紀中頃の須恵器・土師器片を数点含んでいる。層厚は0.10～0.25mを測る。

IV 黒色砂礫層 16-1区全体に見られる、黒ずんだ礫を多く含む層である。落ち1では弥生時代後期の新しい段階の上器を包含する。層厚は0.40～0.50mを測る。

16-1-b区 (No.46から北へ12m～No.49区間)

0 道路路盤及び盛土

I 灰色シルト層 旧耕土である。須恵器・陶器片などが含まれ、層厚は0.10～0.15mを測る。

II 黄褐色粘土層 I層の床土である。土師器片を数点包含する。近世期以降の小溝を検出した。層厚は0.10m強を測る。

III 黄色粘土層 この地区に3面にわたって南北にのびる鞋畔の2面目にあたる鞋畔上を覆う層である。平面プラン上ではSD2の埋土となる。目立った遺物はない。層厚は0.1m弱を測る。

IV 灰黄褐色粘土層 南北にのびる3面目の鞋畔の上を覆っている層である。平面プラン上ではSD4の埋土となる。遺物は含まれない。層厚は0.10～0.15mを測る。

V 灰褐色粘土層 (マンガン粒を多く含む) 南北にのびる最も古い面の鞋畔を形成する。平面

プラン上では S D 4 の埋土となる。土師器・須恵器・瓦器片を数点含む。層厚は 0.1 m 前後を測る。

VI 黄色粘土層(マンガン粒を含む) この地区のほぼ全域で検出できる層であり、平安期の小溝、土坑などを検出した。皿などの土師器片、須恵器片を包含する。層厚は 0.10 m 弱を測る。

VII 灰黄褐色粘土層(マンガン粒を含む) 北端部では認められない。須恵器(飛鳥～奈良期)、弥生土器片を包含する。遺構は存在しなかった。層厚は 0.20 ～ 0.30 m を測る。

VIII 暗灰色礫層 16-1 区の全域にわたって検出できる礫層であり、どす黒い色を帯びる。5世紀後半から 6 世紀初め頃の壺蓋や壺などの須恵器片、弥生土器片を包含する。層厚は 0.4 m 以上を測る。また、この層は No.48 から南へ 7 m 程で切れる。

また、この暗灰色礫層を除去すると、黒味がなくなる灰色礫層を検出できる。この層からは遺物の出土は確認できなかった。

16-1-c 区 (No.49 ～ No.50 + 3 m 区間)

0 道路路盤及び盛土

I 灰色シルト層 旧耕土で 2 面が重なり、全体に土師器・須恵器・磁器片、瓦などを包含する。

①灰色シルト層 上の耕作土で、層厚は 0.10 m 強を測る。

②灰褐色シルト層 上の耕作土に伴う床土で、層厚は 0.05 ～ 0.10 m を測る。

③やや暗い灰色シルト層 下の耕作土で、層厚は 0.1 m 弱を測る。

④灰褐色シルト層 下の耕作土に伴う床土で、層厚は 0.05 ～ 0.15 m を測る。南にいくほど厚くなる。この層は南部のみで確認できる。

II 灰黄色シルト～粘土層 近世期の遺構検出面であり、土師器・須恵器片を数点包含する。

16-1-b 区 2 面目畔の検出面に対応する。層厚は 0.05 ～ 0.15 m で、北側に向かって減じる。

III 灰褐色シルト層 中世期の耕作痕を検出した。土師器・須恵器片を数点包含する。層厚は 0.10 ～ 0.15 m を測る。

IV 褐色細砂～シルト層(マンガン粒含む) 平安期の遺構面である。土師器片を包含する。層厚 0.10 m 強を測る。

V 暗灰黄色砂質土層 南側部分では褐色シルトの礫(径 0.5 ～ 1.0 m)を少量含む層に移行する。層厚は北側では 0.20 m、中程では 0.20 m、南へは 0.15 m と減ずる

(藤井)

第 2 節 16-2 区 安威城跡

北側の 16-2 区は南北に約 207 m、東西 2 m の細長いトレンチで、北から南に向けて徐々に低くなる。旧耕土上面高は T.P.29.1 m から 27.5 m となり、その高低差は約 1.6 m を測る。層序についても 16-1 区同様、大きく 7ヶ所の地目替わりにおいて段差があり、最も大きなものは No.71 + 15 m 付近の 0.6 m のものである。

旧耕作面が 8 段の雑壇に分かれることから、南端より No.66 から北へ 10P m までを 16-2-a 区、これより No.68 付近までを 16-2-b 区、さらにこれより No.69 付近までを 16-2-c 区、

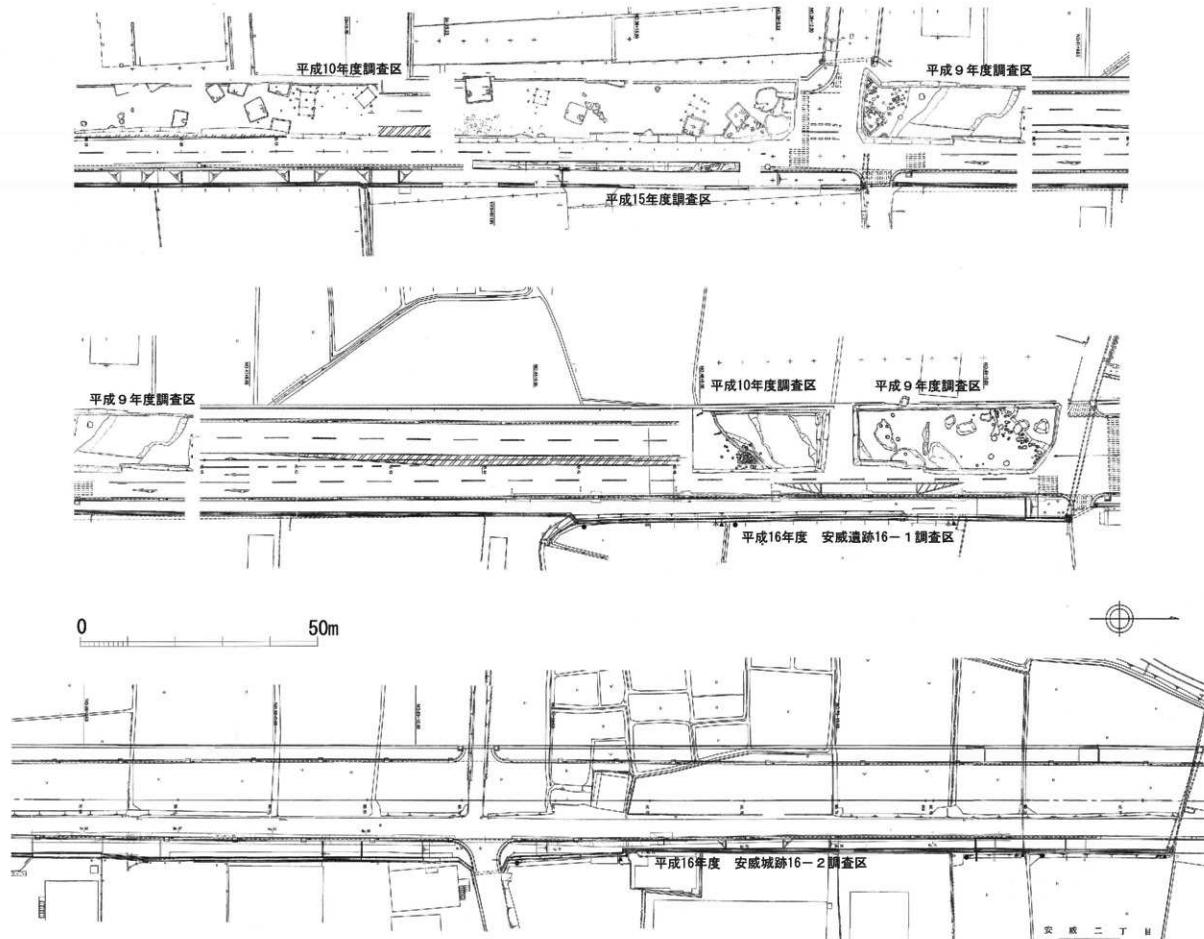


図2 安威遺跡16-1・安威城跡16-2他 調査区配置図

これより No.70 から北へ 5 m のライン付近までを 16-2-d 区、これより No.71 付近までを 16-2-e 区、No.71 から北へ 15 m 付近までを 16-2-f 区、No.75 から北へ 16 m 付近までを 16-2-g 区として記述していく。

16-2 区の全体的な基本層序は全体に下部は南へと下がり、現況以上に勾配が急になる。旧耕土・床土下には下へ中・近世の薄灰褐色粘質シルト系、暗灰褐色粘質シルト系、古墳時代後半以降の黒灰褐色礫・シルト系の層が重なる。東西方向の谷埋没土を中心として布留期以降の暗灰褐色粘質シルト系、弥生時代後期～庄内期古段階の薄灰褐色粗砂・黄灰褐色砂層がある。地山は粗礫を多く含む砂礫層となる。
(一瀬)

16-2-a 区 (No.65 + 9 m ~ No.66 + 10 m 区間)

O 道路路盤及び盛土 1 層厚は約 1.20 m ある。

- I 黒灰色・粘シルト層 2 旧耕土。層厚は約 0.08 ~ 0.20 m を測る。上面は 27.5 m である。
- II 赤味灰色・シルト層 3 (層厚約 0.16 ~ 0.22 m)・黄褐色粘土層明黄褐色・シルト層 4 (土師器甕片が出土する。層厚 0.04 ~ 0.10 m)・黄味灰褐色・シルト層 9 (層厚 0.04 ~ 0.10 m) I 層の床土・客土である。9 は No.66 ~ No.67 区間に現れる。
- III 薄灰褐色・粘～シルト層 5 (マンガン粒を少量含む) 床土の直下に No.65 中程～No.66 かけて見られる。土師器甕・須恵器片が出土する。層厚は 0.06 ~ 0.12 m を測る。
- IV 黒灰色礫層 6 この面でピットを 3 基検出し、層厚は約 0.10 ~ 0.30 m ある。
- V 暗灰褐色・粘～シルト層 7 (マンガン粒多く・床土ブロックを含む、整地上) No.66 地点より黒灰色礫層と床上層との間に存在する土である。層厚は 0.06 ~ 0.15 cm を測る。
- VI 薄灰褐色上層 10 (シルト・礫を微量・マンガン粒を含む) 層厚は 0.30 m を測る。

16-2-b 区 (No.66 + 10 m ~ No.68 区間)

埋管のすぐ北側 2 m ほどは、旧耕作雑塙造成時の裏込め土のため層が複雑になる。

O 道路路盤及び盛土 1 層厚は約 1.10 m ある。

- I 黒灰色・粘シルト層 2 旧耕土。須恵器・陶器片が出土し、層厚は 0.08 ~ 0.20 m を測る。
- II 赤味灰色・シルト層 3 (層厚約 0.08 m)、黄褐色粘土層明黄褐色・シルト層 4 (土師器甕片が出土する。層厚約 0.10 m) I 層の床上・客土である。須恵器・陶器片が出土する。
- III 薄灰褐色土層 (シルト・礫を微量・マンガン粒を含む) 10-a の VI 層と同じで、SK2 から弥生時代後期の壺や布留式甕・杯片が出土する。0.30 m の層厚全体で土師器甕片が出土した。
- IV 暗灰褐色・シルト・マンガン粒少量含む層 11 SD1 と SK2 の間にかけて見られ、SD1 を検出した。層厚は 0.06 ~ 0.20 m を測る。
- V 暗灰褐色土層 (砂・細礫少量含む) 12 SK1 を検出し、庄内～布留期の高杯が出土した。この層全体では、土師器甕片が見つかっている。層厚は 0.04 ~ 0.15 m を測る。
- VI 暗灰褐色土層 13 (シルト・細礫・土器片微量・マンガン粒を含む、層厚 0.05 ~ 0.16 m) と暗灰褐色土層 14 (砂・細礫少量含む、層厚 0.02 ~ 0.15 m) 13 は土師器甕・長頸壺・杯片が

見つかり、北側では土器7(土師器杯)が完形で出土した。また他に土師器壺片も出土する。

VII 薄灰褐色・粘シルト・細礫少量含む層 15(層厚 0.04 ~ 0.3 m)、灰褐色・砂シルト・細礫微量含む層 18(層厚・掘切り面より ~ 0.08 m) 15 からは土師器壺片が見つかった。VI層下の薄灰褐色・砂・細礫少量含む層は No.67 より約 5 m のところで終わり、灰褐色・砂・細礫が非常に多く・薄灰褐色シルトブロックを含む層 17(層厚 0.22 ~ 0.23 m) がこれに続いている。

VIII 薄灰褐色・粗砂・礫が非常に多い層 19(層厚 0.14 m 以上)、暗黄灰褐色・砂層 20(層厚・掘切り面 ~ 0.12 m)

IX 磕層

16-2-c区 (No.68 ~ No.69 区間)

大落ち北端から No.68 より南に 0.80 m のところに埋管があり、ここを境に上層の層序が変わる。したがって、ここが道路築造前の難壇で、埋管すぐ北側の黒褐色・シルト・礫非常多いマンガン粒多く含んだ層は、壇造成時の裏込め土と思われる。

0 道路路盤及び盛土 1 層厚は 0.90 ~ 1.00 m ある。

I 黒灰色・粘シルト層 2 旧耕土である。層厚は 0.1 m を測る。

II 赤味灰色・シルト層(層厚約 0 ~ 0.12 m) 3・黄褐色粘土・明黄褐色・シルト層 4(層厚約 0.2 m) I 層の床土・客土である。土師器・須恵器片が見つかっている。

III 黒褐色・シルト・細砂・マンガン粒多く含む層 21(層厚 0.04 ~ 0.18 m)

IV 暗褐色・細砂・礫混じり層 22(層厚 0.18 ~ 0.2 m)、暗褐色・細砂・礫多く混じる層 23(層厚 0.2 m 以上)、褐色・細砂・礫少量含む層 23' 23' は No.68 より北へ約 3 m のところで確認できる。22 では土師器壺片が出土している。

V 灰褐色・粘シルト・マンガン粒多く含む層 24(層厚 0.6 ~ 26cm) SD 4 を検出し、層全体では土師器壺片が見つかった。

VI 暗褐色・シルト・礫少量含む層 25(層厚 0.08 ~ 0.14 m) No.68 側より認められる。

VII 薄灰褐色・砂混じりシルト・礫少量含む層 26(層厚 0.08 ~ 0.18 m)

VIII 灰褐色・砂・礫とても多く含む層 27(層厚 0.10 ~ 0.24 m)

IX 薄黄灰褐色・砂・上器片含む層 28(層厚 0.10 ~ 0.28 m) 弥生時代後期の甕を含む。

X 黄味灰褐色・粘シルト・細礫少量含む層 29(層厚 0.10 ~ 0.14 m)

灰褐色・砂・上器片含む層 30(層厚 0.80 ~ 0.2 m)、薄灰褐色・シルト・褐色細粒を縦降り状に含む層 31(層厚 0.06 m 以上) 30 は SD 5・6 より庄内期の平底の甕・壺片が見つかった。31 より下で SD 6 より北にある 32 層では、SP 6 から弥生時代後期～庄内期の甕が出土する。

16-2-d区 (No.69 ~ No.70 + 5 m 区間)

No.69 の埋管部分を境に、南北で層序・層厚が変わることから、これまでの区間と同じようにここにも難段がある。

0 道路路盤及び盛土 1 層厚は 0.91 ~ 1.04 m ある。

- I 黒灰色・粘シルト層 2 旧耕土である。層厚は 0.06 ~ 0.12 m を測る。
- II 赤味灰色・シルト層 3 (層厚 0.13 ~ 0.15 m) 黄褐色粘土層明黄褐色・シルト層 4 (層厚 0.02 ~ 0.11 m) I 層の床土・客土である。4 からは土師器・須恵器表片が出土している。
- III 黄味灰褐色・砂混じりシルト・礫少量含む層 33 (層厚 0.1 ~ 0.21 m)、薄灰褐色・粘シルト・細礫含む層 34 (層厚 0.08 ~ 0.21 m)、灰味黄茶褐色層 37 (層厚 0.08 ~ 0.1 m)、暗黄褐色・粘シルト・マンガン粒多く含む層 38 (層厚 0.30 m 以上) 34 層からは多くの遺構が確認された。S P 9 で庄内期以降の表片が出土。S P 8 は土師器瓶・須恵器杯・表片が見つかった。また、当層より土器 3 (土師器表) が見つかっている。33 層でも遺構を検出。S D 7 は上師器表片を出土。37 は北端にあり、S D 11 から土師器表片、周辺から須恵器表片が見つかる。38 も北半にあり、S P 11・12 が検出された。
- IV 薄灰褐色・砂層 35 (層厚 0.24 m 以上) S D 8 からは庄内期古段階の表が見つかった。
- V 薄黄灰色・シルト・マンガン粒微量・細礫少量含む層 36 (約 0.25 m 以上)

16-2-e 区 (No.70 + 3 m ~ No.71 間)

No.70 より北へ 2.26 m ~ 5.22 m で埋管部分となり、そこを境に南側は前区間と層序は同じで、北側では層序が変わることから、これまで述べてきたように旧耕作土の雑壇部分に相当する。

- O 道路路盤及び盛土 1 層厚は 0.97 ~ 1.12 m ある。
- I 黒灰色・粘シルト層 2 旧耕土である。層厚は 0.02 ~ 0.04 m を測る。
- II 明青灰色・シルト層 41 (層厚 0.02 ~ 0.04 m) 41 では S P 13、S K 4・5 を検出し、上師器杯片と須恵器杯片が見つかった。
- III 黄橙色・粘土・床土 39 層厚は 0.03 ~ 0.06 m を測る。
- IV 黄橙色粘土と灰色細砂の混合層 40 層厚 0.03 ~ 0.10 m であり、土師器表片が見つかる。
- V 灰味黄茶褐色層 37 層厚は 0.08 ~ 0.10 m を測る。この層では S D 11 を検出した。深さ 0.14 m で土師器表片、また周辺から須恵器表片が出土する。
- VI 暗黄褐色・粘シルト・マンガン粒多く含む層 38 (層厚 0.30 m 以上) この層では S P 11・12 が検出された。

16-2-f 区 (No.71 ~ No.71 + 15 m 間)

No.72 手前の埋管部分で大きく層序が変わる。また No.71 より北へ 7.40 m のところにある暗渠を境に床土より上層が変わっている。

- O 道路路盤及び盛土 1 層厚は 1.00 m ある。
- I 黒灰色・粘シルト層 2 現代の耕作土である。層厚は 0.60 ~ 0.96 m を測る。
- II 黒灰色・礫層 42 (層厚 0.10 ~ 0.13 m)、黄褐色粘土層明黄褐色・シルト層 4 (層厚 ~ 0.05 m) I 層の床土・客土である。
- III 38 層 (層厚 0.20 ~ 0.50 m)、黄褐色・細砂混じりシルト～粘土層 43 (層厚・掘切り面 ~ 24cm) へと続く。38 から S K 6 を検出した。他層では遺構・遺物は特には見られなかった。

16-2-g区(No.71 + 15 m ~ No.75 + 16 m区間)

埋管部分で段ができる、大きく層序が変わる。

0 道路路盤及び盛土1 層厚は0.91~1.04mある。

I 黒灰色・粘シルト層 現代の耕作土である。層厚は0.06~0.12mを測る。土師器・土釜・甕片・須恵器片・陶器片などが見つかった。

II 41層(層厚約0~0.8cm)が続き、その下に青灰色粘土と黄褐色粘土の混合層(層厚約0.04~0.14m)がある。そして上区間と同じように黄褐色粘土層明黄褐色・シルト層4(層厚0.02~0.11m) 1層の床土・客土である。4からは土師器皿・甕片・須恵器壺・杯片が出土する。

III 41層・43層が続く。41層ではSD12を検出。暗灰褐色・粘シルト・礫少量含む層44(層厚0.08~0.16m)、44層ではSD13の南半部分を検出し、土師器片・須恵器片が出土した。当層全体でも上師器碗片や須恵器甕片が見つかっている。45層では上師器片・須恵器甕片がある。灰褐色・粘シルト・細礫多く・マンガン粒を多く含む層45(層厚0.42m~)、赤味褐色・粘土混じり砂・礫少量含む層46(掘切り面上層)の層序となっている。

暗褐色・礫多く・マンガン粒少量含む層47(層厚0.24~0.40m) この層からはSD13の北半部分が、暗褐色・シルト・小礫やや多く含む層48(層厚0.08~0.22m)、続く暗褐色・シルト・小礫少量・マンガン粒少量含む層49(層厚0.14~0.26m) 49層全体では土師器甕片が出土した。さらに、SP15・SD14・15を検出し、SD14の埋土中より須恵器蓋片が出土する。SP16埋土中では土師器片が見つかる。さらにその下に、南側より黄味暗灰褐色・シルト・礫多く・マンガン粒少量・一部に砂を含む層50(層厚0.38m~)、黄味薄灰褐色・シルト・礫覆う・マンガン粒少量含む層51(層厚0.28m~)、黄味薄灰褐色・シルト・礫少量含む層(層厚0.10~0.24m) 52層ではSP17を検出。SK7埋土中より土師器片が見つかった。その下に黄味薄灰褐色・シルト・大礫多く含む層53(層厚0.53m~)がある。

No.74~No.75区間床土4の下層である49層がNo.73から北へ9mの地点で薄灰褐色・シルト・マンガン粒少量・暗黄灰色シルトブロックを含む層54(層厚・掘切り面~16cm)に変わる。55ではSP18を検出。灰褐色・シルト・マンガン粒多く含む層56(層厚0.08~0.13m)、暗灰色・礫層57(層厚0.20m以上)である。

(富田)

第3章 検出遺構

第1節 16-1区 安威遺跡

No.44～No.45区間

II層 SD1はT.P.23.1mで検出した。幅0.50mで、南北にのびる。埋土は灰色シルトで出土遺物はなかった。

IV層 SD2はSD1の下層に相当し、同じくT.P.23.1mで検出した。幅0.70mで、南北にのびる。土師器片を含む。落ち1は黒色砂礫が下がり、弥生時代後期の新しい段階の土器を含む。

No.45～No.46区間 (a)

I層 耕作地の段を形成する。T.P.23.2～23.3mで検出し、わずかに南北から東に傾く。

II層 SD1はT.P.23.2mで検出した。東肩が未検出で幅は不明。前区間から続き、東壁に出て行く。

III層 SK2はT.P.23.0mで検出した落ち込み状のもので、南北3.2mであり、西半分は調査区外に広がり、東西は不明である。土師器片を含む。谷1はT.P.23.1mで、北西から南東にはしる谷である。幅は7mで最深部はT.P.22.7mを測る。埋土は3層に分かれ、上から黄褐色粘土、暗灰色シルト、黄灰色シルトで、土師器片を含む。

No.46～No.47区間 (a・b)

I層 前区間から続く耕作地の段で、T.P.23.3mで検出する。

II層 SD1は調査区南壁からやや東に傾いて、東の調査区外にのびていく南北溝である。T.P.23.0mで検出し、埋土は灰色シルト、遺物は含まない。No.44～No.46区間のSD1とは別のものである。

III層 No.48から続くSD2を検出した。

IV層 落ちはT.P.22.85mで検出し、調査区中央付近から北へ向かって下降し、北へ層が増えた。SP1・2・3は落ち上面のT.P.22.85mで検出したが、残りが悪く判然としない。

V層はNo.44～No.46から続く砂層で、遺構は見られなかった。

No.47～No.48区間 (b)

III層 SD1・2は調査区をわずかに西に傾く南北溝で併行してある。T.P.23.4mで検出し、溝間が畦2となる。

IV層 SD3・4をT.P.23.0m検出した。調査区を南北にはしり中央部で西に曲がる。畦3を形成する。

VI層はT.P.23.1mでピットSP1・2、南北溝のSD5～12を検出した。SP1は径0.40・深さ0.04mで、埋土は灰黄色シルト。SP2は径0.20・深さ0.09mで、埋土は灰褐色シルト。SD5は長さ17.00・幅0.20・深さ0.05mで、埋土は灰褐色シルト、土師器片が出土する。SD6は長さ3.00・幅0.50以上・深さ0.05mで、埋土は暗灰色シルト。SD7は長さ2.00・幅

0.17・深さ 0.05 mで、埋土は褐灰色シルト～粘土。SD 8は長さ 2.00・幅 0.20・深さ 0.04 mで、埋土は黄褐色シルト～粘土、土師器片が出土する。SD 9は長さ 5.00・幅 0.60 以上・深さ 0.10 mで、埋土は明灰褐色～粘土、瓦器・土師器片が出土する。SD 10は長さ 16.0 以上・幅 0.8・深さ 0.03 mで、埋土は褐灰色シルトであり、SD 11は長さ 2.40 以上・幅 0.10・深さ 0.04 mで、埋土は褐灰色シルト。SD 12は長さ 0.10 以上・幅 0.10・深さ 0.04 mで、埋土は暗灰色シルトである。

VII層 谷 1 は調査区を南西から北東にはしる。幅 7.0 m、T.P.22.7 ~ 8 mで検出した。深さは掘削限界より深いために確認できなかった。埋土は上部 2 層のみが確認でき、1 層は黄灰色シルト～細砂（マンガン含む）、2 層は暗灰色シルト～細砂で遺物は含まない。

No.48 ~ No.49 区間 (b)

III層 T.P.23.5 mで検出した遺構は溝 4 本である。SD 1 は No.47 ~ No.48 の SD 2 から続き、畔 2 を形成する。長さ 9.00 以上・幅 1.00 以上・深さ 0.05 mを測る。SD 2 は長さ 1.00 m 以上・幅 0.2・深さ 0.04・深さ 0.06 m の小溝。SD 3 は長さ 1.4・幅 0.25 m 以上・深さ 0.06 m で、埋土は灰褐色粘土～シルト。SD 4 は長さ 2.60・幅 0.30・深さ 0.05 m で、埋土は灰色砂質土。

IV層 SD 5 は No.47 ~ No.48 の SD 3 の続きの畔 3 を、SD 6 は No.47 ~ No.48 の SD 4 の続きの畔 3 を形成する。

V層 畔 1 は SD 7 (6) は長さ 5.00・幅 1.00・深さ 0.10 m、T.P.23.4 mで検出。埋土は褐灰色粘土に灰色シルトが混入する。

VI層 平安期の面。長さ 1.50 m、幅 1.00 m、深さ 0.18 m の SK 1 のみ埋土は明灰褐色土であり、他はいずれも埋土は灰黄色粘土である。SD 8 は長さ 3.00・幅 0.18・深さ 0.30 m。SD 9 は長さ 1.00・幅 0.50 以上・深さ 0.3 m。SD 10 は長さ 0.7・幅 0.25・深さ 0.60 m。SD 11 は長さ 0.60・幅 0.10・深さ 0.20 m。SP 1 は径 0.40・深さ 0.06 m である。

VII層 SP 2 は T.P.23.15 mで検出した南北長 0.40・幅 0.60 以上・深さ 0.05 m、埋土は明灰色シルトである。

VIII層 谷 2 は北肩を T.P.22.7 ~ 8 mで、南肩は No.47 ~ No.48 で検出したもので、調査区を南西から北東へ斜めに横切る。幅は 16.00 m の広いもので最深部は調査掘削限界を超える。埋土は 1 層が明灰色礫を多く含み、2 層は黄灰色シルトに鉄分が沈着する。3 層は暗灰色シルト～細砂に褐色ブロック土を含む。

No.49 ~ No.51 南区間 (c)

II層 溝 3 本を T.P.23.4 mで検出した。SD 1 は調査区を東西にはしる小溝。SD 2 に攪拌される。長さ 0.70 以上・幅 0.25・深さ 0.18 m。埋土は礫を少量含んだ暗褐色シルト。SD 2 は調査区を北東から南西にはしる溝で、SD 1 を切り、その南北端は切れる。南北長 2.5・幅 0.3・深さ 0.07 m で、埋土は暗灰黄色粘土～シルト。SD 3 は調査区を南北にはしる溝である。No.48 ~ No.49 から続く SD 4 と同じ溝と考えられる。南北長 3.0・幅 0.5・深さ 0.07 m。埋

土は灰色砂質土。

Ⅲ層 落ち1は調査区東西の中央付近から西に向かって下降する落ちで、T.P.23.55 mで検出した。北区では検出できなかった。長さ6.00・幅0.90以上・深さ0.03 m。埋土は灰褐色シルトに黄白色シルトが混入する。遺物は第3層として取り上げた7世紀中頃の壺・杯身などの須恵器・土師器片が相当する。SD4はSD3と同じ溝であるが、Ⅲ層上層を構成する。

IV層 SD6はNo.48～No.49のSD7から続き、T.P.23.3 mで検出した。出土遺物に瓦器片がある。畔1(SD5)はNo.48～No.49から続くもので、畔の構成上は明褐色シルトで、頂部はT.P.23.3 mで検出した。落ち2はT.P.23.3 mの高さで検出し、No.49枠部南北中央よりやや北から南へ下降する。出土遺物に庄内期の古い段階に相当する高杯脚部などがある。埋土は上層が黄色粘質土、下層は明褐色砂質土になる。落ち3は本区を北西から南東にはしる北肩をT.P.23.25 m付近で検出した。深さは0.1～0.2 mである。

No.49～No.51 北区間

Ⅱ層 SP1は径0.40・深さ0.03 mで、埋土はマンガンを含む褐色シルトである。SP2は径0.3・深さ0.07 mで、埋土は褐色シルトで、土師器片を含む。SP3は南北に細長い楕円形のもので、長さ0.90 m以上、幅0.40・深さ0.10 mを測る。埋土は灰黄色シルトで、土師器片を含む。SD1は本区南部を南北にはしる溝で、北で途切れる。長さ2.0・幅0.2・深さ0.03 mを測る。埋土はマンガンを含む褐色シルトである。SD2は本区中央部を南北にはしる溝である。長さ1.40・幅0.15・深さ0.07 mを測り、埋土は褐色シルトである。SD3はNo.50枠南側を東西にはしる溝で、落ち1を切る。長さ0.7以上・幅0.15・深さ0.12 mを測る。埋土は黄灰色シルトである。

Ⅲ層 落ち1はNo.49～No.50とNo.50～No.51の部分に分かれる。前者は南北に西肩があり、東に下降する。北はNo.50枠部で南東にするほど曲がる。南はほぼ真南にはしるが、No.49～No.51南区手前で西へゆるやかに曲がり調査区外へとのびる。検出面はT.P.23.5 m、深さ0.15 mである。後者はその北西部から南東部に斜めに南肩がはしり、No.50枠部に至る地点で東西に向きを変え、東壁に突き当たりそのまま調査区外へとのびる。検出面はT.P.23.45 m、深さ0.20 mであり、出土遺物に7～9世紀の瓦・土師器片を含む。

IV層 検出面はT.P.23.4 mであり、SD4はNo.49～No.50西壁中央付近から出現し、そのままなだらかに壁沿いをはしる。長さ3.5以上・幅1.00 m・深さ0.13 mである。埋土は灰褐色粘土。SD5はNo.50枠部から南へ南北にはしる溝で、長さ4.8 m・幅0.35・深さ0.07 mである。埋土は暗灰褐色粘土～シルト。

(藤井)

第2節 16-2区 安威城跡

16-2-a区 (No.65+9m～No.66+10m区間)

IV黒灰色疊層面6でピットを3基検出している。SP1南側4m～SP3間に認められ、上

師器甕・須恵器片が出土する。S P 1 は径 0.5 m の方形で深さは 0.34 m、S P 2 は径 0.40 m の方形で深さ 0.30 m、S P 1 が S P 2 を切る。S P 2 からは土師器片が見つかる。S P 3 は径 0.52・深さ 0.20 m である。

16- 2 - b 区 (No.66 + 10 m ~ No.68 区間)

III 薄灰褐色土層面 10 では SK 2 を検出した。長さ 1.88・深さ 0.26 m で、弥生時代後期や布留期の甕・杯片が出土する。

IV 暗灰褐色・シルト・マンガン粒少量含む層 11 では SD 1 を検出した。幅 0.63・深さ 0.20 m で布留期甕と杯が出土した。

V 暗灰褐色土層 12 で SK 1 を検出した。長径 0.92・短径 0.60 m の隅丸方形で深さは 0.10 m だが、掘りこみ面は上になると思われる。ここからは土器 8 の高杯 (庄内・布留期) が裾部を除き、天地逆の状態で出土した。

8 層からは多くの遺構を検出した。SX 1 は径 0.53・深さ 0.28 m、SP 7 は径 0.40・深さ 0.18 m、SK 3 は径 0.5・深さ 0.14 m、SP 5 は径 0.56・深さ 0.20 m で、土師器甕片が見つかっている。SD 2 は幅 2.04・深さ 0.28 m で、土器 4 (庄内期高杯) と土器 5 (庄内式椀もしくは高杯) が、SD 2 南側で弥生時代後期から庄内期の甕が出土する。他に土師器甕片も出土している。SD 3 は幅 1.58・深さ 0.28 m で土師器甕片が見つかった。SP 4・5、SK 3 は平面で検出できず壁面断面より確認したが、それぞれ大きさ・深さが似ており、またほぼ等間隔であることから掘立建物の柱穴の可能性がある。8 層全体でも土師器甕片や土師器杯片が見つかる。

16- 2 - c 区 (No.68 ~ No.69 区間)

V 灰褐色・粘シルト・マンガン粒多く含む層で SD 4 を検出した。幅 0.90・深さ 0.32 m である。

X 黄味灰褐色・粘シルト・細礫少量含む層 29、灰褐色・砂層 30、薄灰褐色・シルト・褐色細粒を霜降り状に含む層 31、すぐ北側において、SD 5 を検出した。幅 1.00・深さ 0.24 m。SD 6 を切る。下層より庄内期中頃の平底甕が完形で 2 個体、隣り合った状態で見つかった (土器 6)。SD 6 は幅 5.70・深さ 0.46 m であり、埋土中より平底の壺・甕片が見つかった。32 層では径 0.53・深さ 0.16 m の SP 6 を検出した。弥生時代後期から庄内期の甕が出土する。

16- 2 - d 区 (No.69 ~ No. 70 + 3 m 区間)

III 黄味灰褐色・砂混じりシルト・礫少量含む層 33 でも遺構を検出。SP 7 は径 0.50 m・深さ 0.28 m。SD 7 は幅 1.80 m・深さ 0.22 m、土師器甕片を出土。薄灰褐色・粘シルト・細礫含む層 34 からは多くの遺構が確認された。SP 10 は径 0.20・深さ 0.15 m で土師器片が出土。SP 9 は長径 0.34・短径 0.20・深さ 0.14 m で、庄内期以降の甕片が出土。SP 8 は径 0.22 m・深さ 0.14 m。SD 11 は幅 1.9・深さ 0.22 m、土師器甕・須恵器杯・甕片が大量に見つかった。SD 10 は幅 3.8・深さ 0.3 m、土師器甕片が見つかっている。

SD 11 の北では灰味黄茶褐色層 37 があり、また暗黄褐色・粘シルト・マンガン粒多く含む層 38 も北半にあり、SP 11・12 が検出された。SP 11 は径 0.18・深さ 0.15 m。SP 12 は径

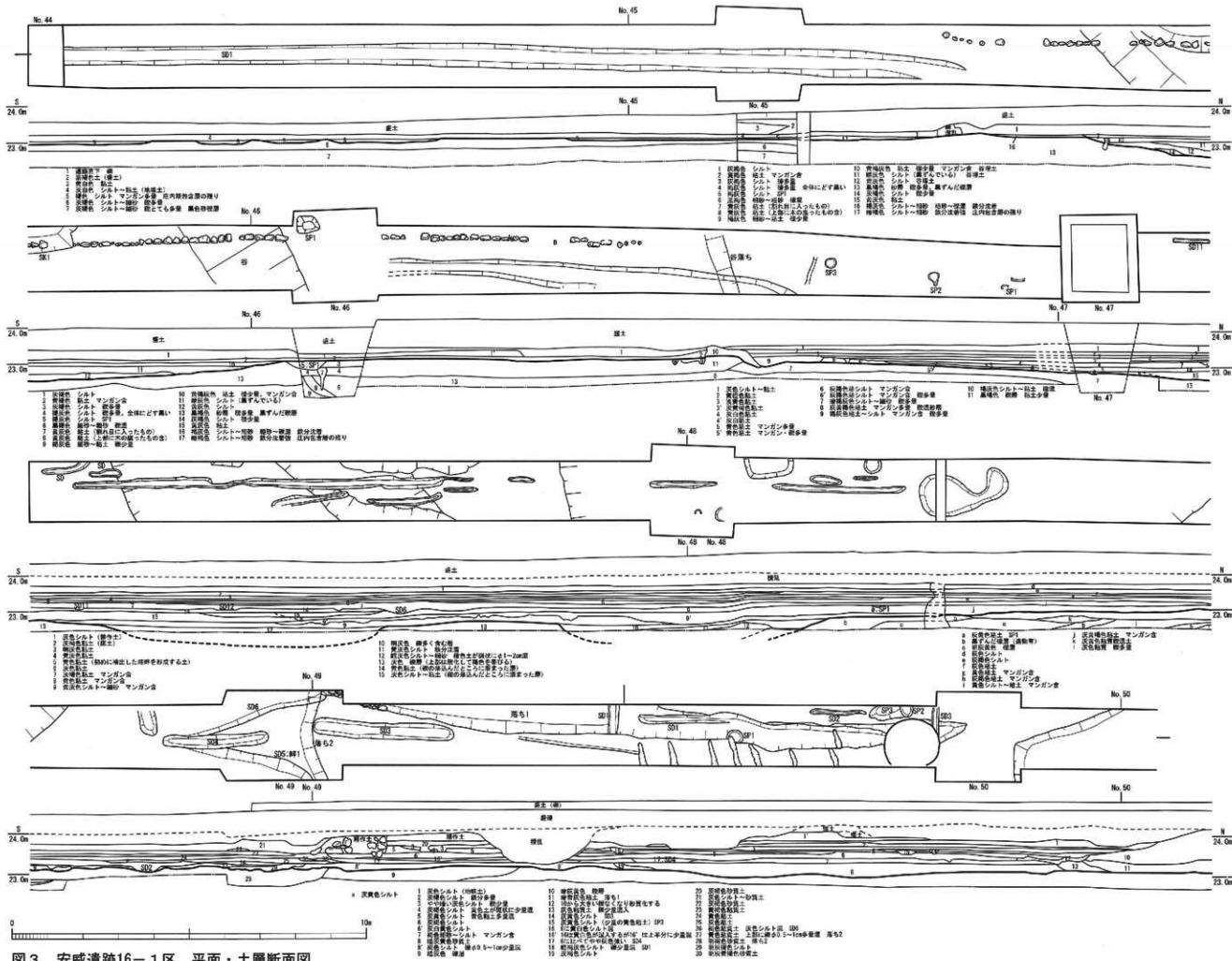


図3 安威遺跡16-1区 平面・土層断面図



図4 安威城跡16-2区 平面・土層断面図(1)

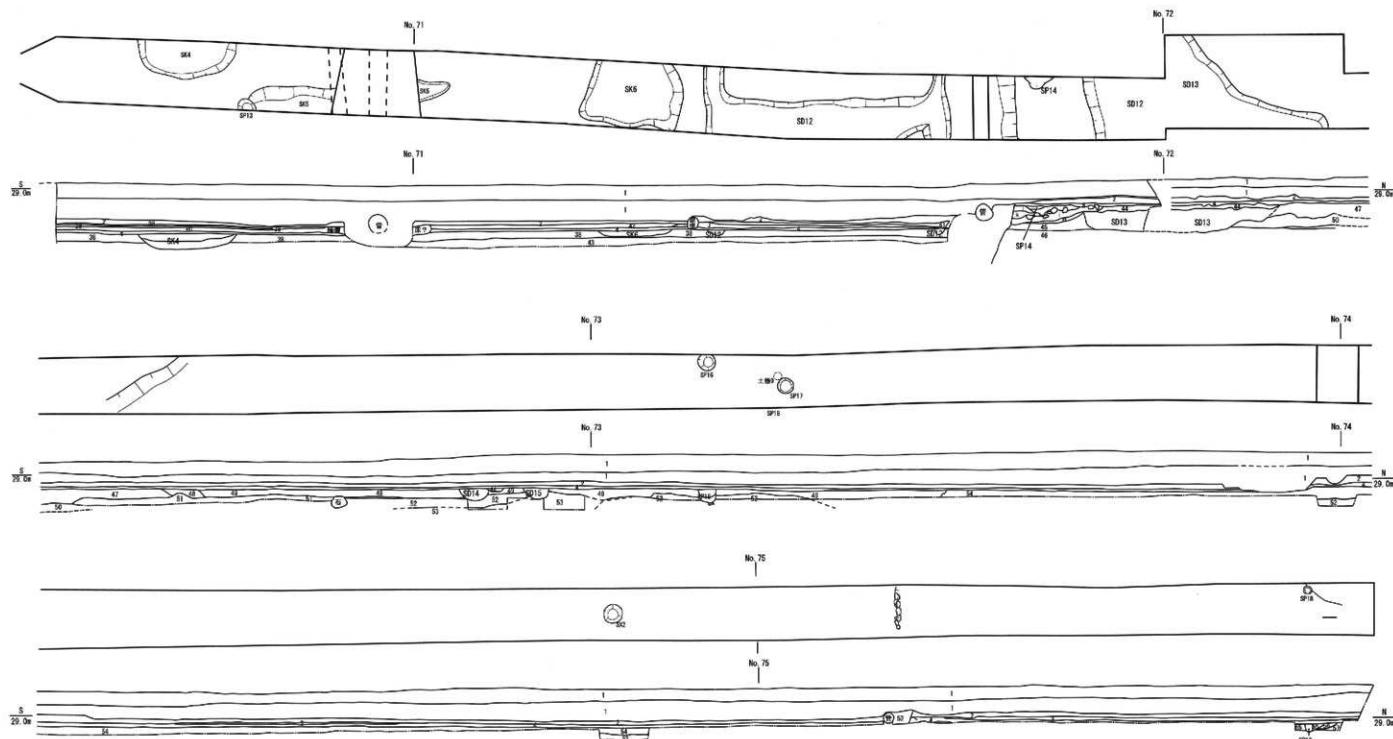


図5 安威城跡16-2区 平面・土層断面図(2)

21 • 22

1 青灰褐色	シルト	粒状多量	青灰色粘土と黄褐色粘土の混合
2 灰褐色	シルト	砂多量	安灰褐色シルト
3 灰褐色	シルト	細少量	青褐色シルト マンガン多量
4 灰褐色	シルト	土質碎片微量	細灰褐色 粘土
5 灰褐色	シルト	微量	
6 灰褐色	シルト	少	
7 灰褐色	シルト	微量	
8 灰褐色	シルト	微量	

0.21・深さ 0.12 mである。

IV 薄灰褐色・砂層 35 で S D 8 を検出した。幅 1.30・深さ 0.18 mで、土器 1 と土器 2 が埋土中より見つかった。ともに庄内期古段階の平底のものである。

16- 2- e 区 (No.70 ~ No.71 区間)

II 明青灰色・シルト層 S P 13、S K 4・5 を検出した。S P 13 は径 0.48 m、深さは不明。S K 4 は長さ 5.40 mで、S P 13 を切っている。S K 5 は幅 2.62 m、深さ 0.41 mで、土師器杯片と須恵器杯片が見つかった。

V 灰味黄茶褐色層 37 では S D 11 を検出した。深さ 0.14 mで土師器壺片、また周辺から須恵器壺片が出上する。

VI 暗黄褐色・粘シルト・マンガン粒多く含む層 38 S P 11・12 が検出された。S P 11 は径 0.18 m、深さ 0.15 m。S P 12 は径 0.21 m、深さ 0.12 m。41 層では S P 13・S K 4・5 を検出した。S P 13 は径 0.48 m・深さは不明。S K 4 は長さ 5.40 m・深さは不明で、S P 13 を切っている。S K 5 は幅 2.62 m・深さ 0.41 mで、土師器杯片と須恵器杯片が見つかった。

16- 2- f 区 (No.71 ~ No.71 + 15 m 区間)

38 層から S K 6 を検出。幅 2.00・深さ 0.16 m。

16- 2- g 区 (No.71 + 15 m ~ No.75 + 16 m 区間)

層 41 では S D 12 を検出。平面で「コ」の字形をしており、北側の壁面断面では幅 0.30・深さ 0.16 m、南側では幅 0.51 m・深さ 0.14 m。層 44 では S D 13 の南半部分が検出され、土師器片・須恵器片が見つかった。層 47 からは S D 13 の北半部分が検出された。幅 3.50 m・深さ 0.60 m。当層全体からは須恵器杯片が出土している。層 49 からは S P 15・S D 14・15 を検出した。S P 15 は径 0.46 m・深さ不明。S D 14 は幅 0.70・深さ 0.32 mで、埋土中より須恵器壺片が見つかった。S D 15 は幅 0.70・深さ 0.30 m。S P 16 は径 0.46 m、深さ 0.35 mで、埋土中より土師器片が見つかる。また当層全体では土師器壺片が出土する。層 52 では S K 7 は径 0.88 m・深さ 0.37 mで、埋土中より土師器片が見つかった。S P 17 は径 0.42 m、深さ 0.24 m。S X 2 は径 0.48 m、深さは未掘のため不明。層 55 では径 0.30・深さ 0.2 m の S P 18 を検出した。 (富田)

第4章 出土遺物

ここでは、今回の調査で出土した遺物を紹介する。出土した遺物は土師器・須恵器を中心で、その他に陶磁器の破片などがある。土師器は庄内期前後のものが No.67～70 区間にを中心に、布留期のものが No.66 区間を中心に出土している。須恵器は No.44～45 にかけての区間で多く見られる。出土遺物のうち、今回図化を果たしたのは図 6 の 5 点である。以下、写真図版番号に従い記述する。また、写真図版には平成 15 年度の安威遺跡出土遺物を 6-7～12 に示している。

5-1 は土師器甕で、口縁部から体部にかけての一部が残存する（図 6-4）。No.67・68～69 区間の S P 5 から出土した。5-2 は土師器甕で、口縁部から体部にかけての一部が残存する。No.68～69 区間の S P 5 から出土した。5-3 は土師器甕で、口縁部から体部にかけての一部が残存する。No.68～69 区間の北側の S D 6 から出土した。5-4 は土師器甕で、口縁部から体部の一部にかけて残存する。No.73～74 区間から出土した。5-5 は土師器甕である（図 6-5）。No.69～70 区間の S D 8 から出土した。5-6 は土師器甕である。No.69～70 区間から出土した。5-7 は土師器甕である。No.68～69 区間の S D 6 から出土した。5-8 は土師器の甕である（図 6-7）。No.69～70 区間の S D 2 から出土した。

6-1 は上師器鉢である。No.68～69 区間の S D 4 から出土した（図 6-6）。6-2 は土師器杯である（図 6-3）。No.67 区間北側の S D 2 から出土した。6-3 は土師器高杯である。No.67～68 区間の北側の S D 2 から出土した。6-4 は土師器高杯で、脚のみが残存している。No.66 区間の北側から出土した。6-5 は須恵器杯身である（図 6-1）。No.46～47 区間から出土した。6-6 は須恵器杯蓋である（図 6-2）。内面底部に同心円状のタタキ痕が残る。No.44～45 区間の東壁面際側溝から出土した。出土層位は礫層である。

6-7 は須恵器杯身である。受け部から口縁にむかって立ち上がる部分が残存する。溝 5 から出土した。6-8 は須恵器杯身である。受け部から口縁にかけての一部が残存する。溝 8 から出土した。6-9 は須恵器杯身である。受け部から口縁にかけての一部が残存する。溝 3 から出土した。6-10 は須恵器杯身である。受け部から口縁にかけての一部が残存する。地山直上から出土した。6-11 は須恵器杯身である。受け部から口縁にかけての一部が残存する。溝 8 から出土した。6-12 は土師器の小形壺である。底部のみが残存する。地山直上から出土した。

各須恵器の型式はその特徴から 6-5 は T K 217～T K 46、6-6・8・11 は T K 10、6-7・9・10 は M T 15 型式と考えられる。

7-1 は土師器甕の口縁の一部である。No.66 区間北側から出土した。出土層位は暗灰褐色砂層である。7-2 は上師器甕である。口縁部から体部にかけての一部が残存する。No.66 区間の北側から出土した。出土層位は灰褐色シルトマンガン粒多層の下である。7-3 は土師器甕である。口縁から体部にかけての一部が残存する。No.66 区間の S D 1 から出土した。7-4 は土師器甕である。口縁から体部にかけての一部が残存する。7-5 は土師器甕である。口縁から体部

にかけての一部が残存する。No.66 区間北側から出土した。出土層位は暗灰褐色砂層である。7
- 6 は土師器甕である。口縁から体部にかけての一部が残存する。

8 - 1 は土師器高杯である。脚のみが残存する。No.49 ~ 50 区の南半の S D 1 から出土した。
8 - 2 は土師器高杯である。脚のみが残存する。No.66 区間北側の S D 1 から出土した。8 - 3
は土師器鉢である。底部のみが残存する。No.66 区間の北側の S K 2 から出土した。8 - 4 は須
恵器杯身である。受け部から口縁にかけての一部が残存する。No.71 ~ 72 区間の南側の S K 4
から出土した。8 - 5 は須恵器の杯身である。受け部から口縁にかけての一部が残存する。No.71
~ 72 区間の南側の S K 4 から出土した。8 - 6 は土師質蓋片と思われる。No.69 ~ 70 区間の
S D 13 から出土した。8 - 7 は須恵器杯身である。口縁の一部が残存する。No.66 区間の S D
2 から出土した。8 - 8 は須恵器杯身である。底部の一部が残存する。No.45 ~ 46 区間から出
土した。8 - 9 は須恵器鉢である。口縁の一部が残存する。No.47 ~ 48 区間から出土した。出
土層位は第 4 層黄色粘土マンガン上層である。4 - 10 ~ 11 は須恵器甕である。体部の一部が残
存する。No.69 ~ 70 区間の S D 5 付近から出土した。4 - 12 は土師器皿である。口縁の一部が残
存する。No.47 区間マス部から出土した。出土層位は第 5 層黄色粘土(マンガン含む)である。
8 - 13 は土師器甕である。把手の部分のみが残存する。No.69 ~ 70 区間北側の S D 11 から
出土した。8 - 14 は青磁碗の底部である。No.46 ~ 47 区間から出土した。出土層位は灰色シ
ルト地味土である。8 - 15 は青磁碗の底部である。No.48 ~ 49 区間から出土した。出土層位
は第 2 層である。8 - 16 は陶器碗の底部である。No.71 ~ 72 区間の床土掘削時に出土した。
8 - 17 は白磁である。底部が残存する。No.47 ~ 48 区間の第 3 層灰色粘土マンガン上層から
出土した。8 - 18 は瓦質火舎片である。No.68 ~ 72 区間から出土した。

(細川)

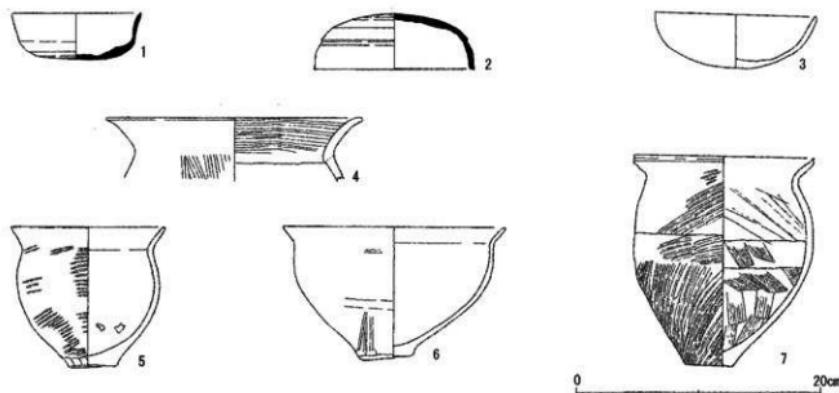


図 6 出土土器

第5章 まとめ

平成16年度に実施した安威遺跡、安威城跡の調査成果は様々であった。まず、安威遺跡16-1区は、上面では古代、下面では古墳時代後半期の灰褐色シルト、弥生時代後期～布留期の黒味のある砂礫層があった。全体に南に下がる地形の中にあって、土層の下半が中央部で検出した谷から北へは下降することから、安威川を東に曲げる段丘の張出しの北端になると見てよい。すなわち、かえって高くなる南端の黒味のある砂礫層が削平気味で露出することにより、5世紀後半を中心とする古墳時代の遺物がすぐに確認できるということになる。この微高地上に南側の平成9・10年度調査区で検出した竪穴住居群が立地し、本調査区ではその北限を確認したことになる。

検出した遺構は南側で南北溝、落込み状の土坑、中央の谷の埋没面で平安時代の溝・ピット。その上部にも瓦器などを含む中世以降の南北溝とピット。北側上部は中央より続く瓦器を含む溝、

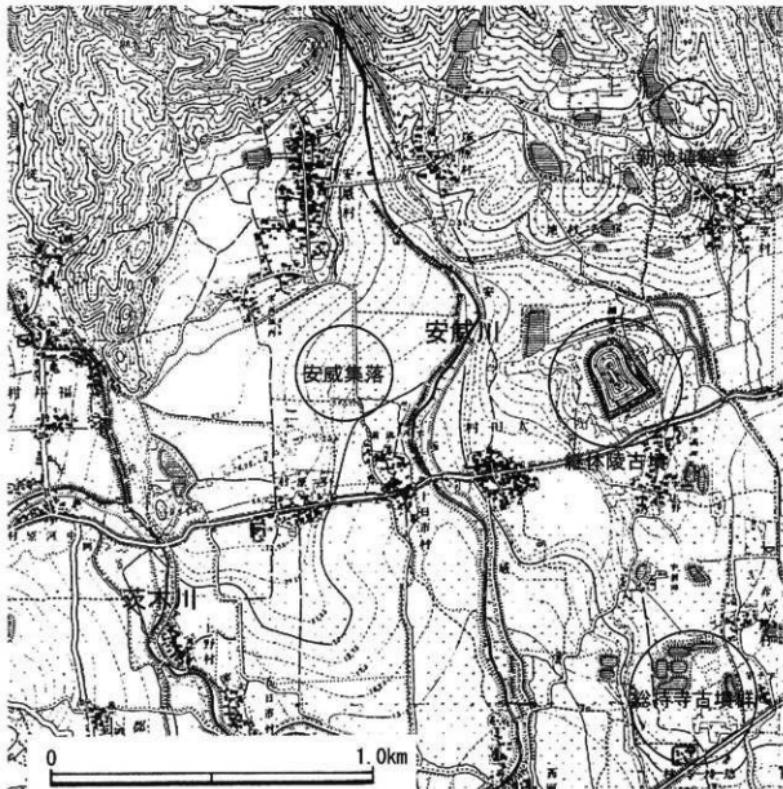


図7 継体陵古墳・新池埴輪窯と安威遺跡

下に7世紀中頃の須恵器壺・杯身が出土する落ちがあった。最も下部では、中央の谷の前身となる落ち3で庄内期の高杯脚部が出土し、周辺一帯はまんべんなく当該期の包含層があることが分かった。

安威城跡16-2区は、旧耕作面が8段の雑塙が全体に下部は南へと下がり、現況以上に勾配が急になる。東西方向の谷埋没土を中心として布留期以降の暗灰褐色粘質シルト系、弥生時代後期～庄内期古段階の薄灰褐色粗砂・黄灰褐色砂層があり、この北半に中心に弥生～奈良時代の遺構が存在することが分かった。

具体的な遺構として、南端部においてピット、土坑、落込み、溝があり、南西-北東溝SD1・2から庄内-布留期の高杯が、北半の東西溝SD4からは庄内期前半の平底甕が出土する。中央部南半では弥生時代後期～庄内期のまとまったピット、溝を検出した。ここでも南西-北東溝SD7があり、庄内期古段階の平底甕が見られる。北接して7～8世紀の土師器・須恵器を含む東西溝SD11を南限にして掘立柱、土坑の他、一辺5.5mの方形周溝状のものも認められる。すぐ北の土師器・須恵器を含む南西-北東溝SD13から北の北端部は様相が一変し、地山が高く包含層は薄くなり、浅い位置でピット、土坑、溝を検出することになった。

今回の調査区は16-1・2区双方とも、谷中心に弥生時代後期から庄内期の遺構・遺物の分布範囲が南北600m以上に及ぶことが分かった。また、16-1区南端部では竪穴住居群の北端の状況や、16-2区中央部北半で7世紀中頃の建物群や16-1区では中世期の耕作地といった連続と続く遺構・遺物が確認できた。

こうした成果で特に注目できることは2つある。まず、庄内期前後の面的な拡がりの大きさである。それは南方において、昭和23年の古墳時代前期初頭上墳墓の確認や、茨木市教育委員会調査の弥生時代後期資料を含めると(注1)、南北1kmという長大な集落域が想定できることである。

そして、今回の調査で竪穴住居群の北端をおさえたとするならば、300m東にある安威川が大きく東に振る箇所を束限に、南北350・東西200m以上の集落規模が考えられる。この中心より東に1kmで縦体陵古墳の中心という間隔である(図7)。すなわち、安威川をはさんだ両岸の最も接する安定した土地に両者は位置することになり、時期的に共通するものもあることから、古墳時代中期の安威遺跡における集落の発展は古墳造営キャンプを契機にしていた可能性は高い。

(一瀬)

(注1) 茨木市教育委員会 1997 「平成8年度発掘調査概報」他

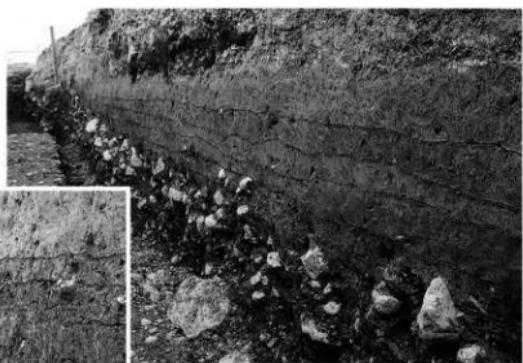
(注2) 本調査には、藤田道子、藤井信之、細川晋太郎、富田卓見、高嶋千佳、田中真希代をはじめとする諸博士の助力があった。



No. 45~46区间 SD 1 (北から)



No. 47~48区间 SD 3・SD 4 (北から)



No. 46~47区间 西壁 (北東から)



No. 45~46区间 西壁 (北東から)



No. 48~49区间 SD 1 (北から)



No. 49~50区间南半 SD 4、畔 1 (南から)



No. 67~68区间 土器 4 (南東から)





No. 67~68区間
S P 5 (北東から)



No. 68~69区間
土器 6 (東から)



No. 69~70区間
S D 2 (東から)

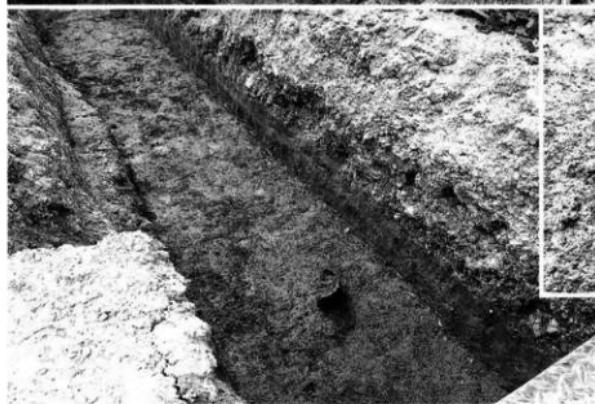
No. 69~70区間
全景 (南から)



No. 70～71区間北側
SK 2 (南東から)



No. 71～72区間南側
SD 2 (北から)

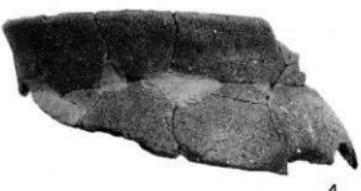
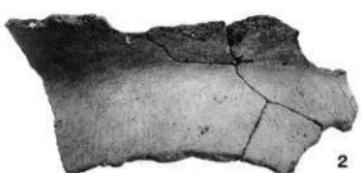


No. 72～73区間南側
土器9 (北東から)



(北から)

図版 5 出土土器



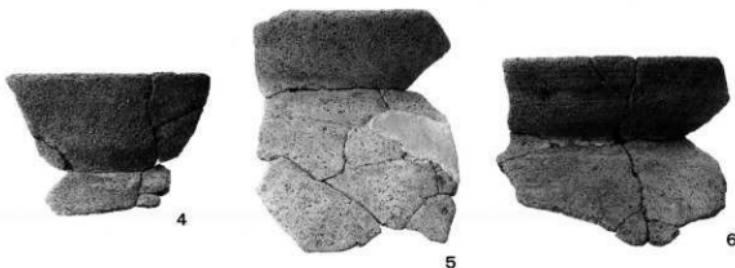
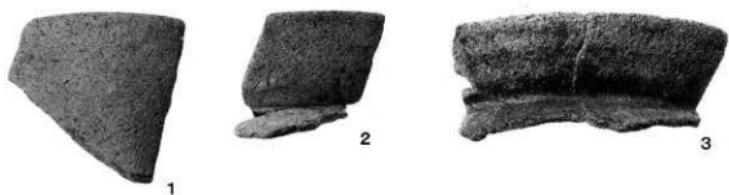
変形土器

図版 6 出土土器

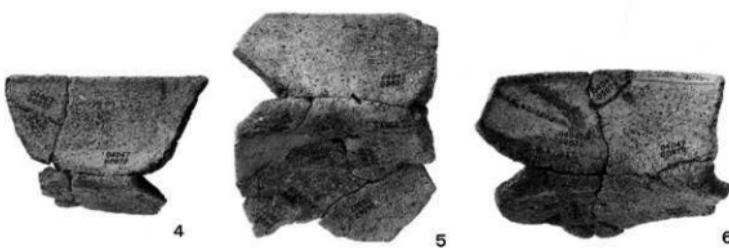
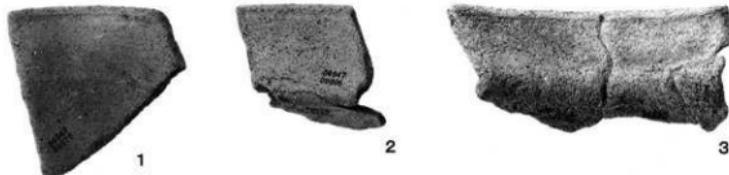


弥生土器・土師器・須恵器

図版 7 出土土器

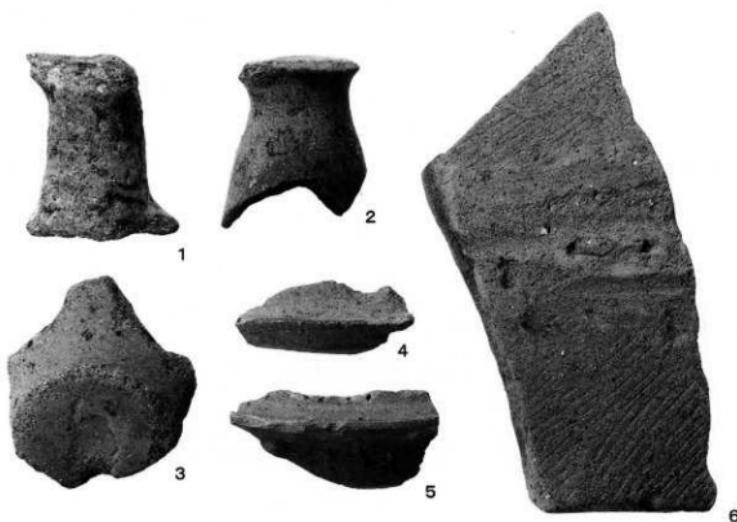


外面

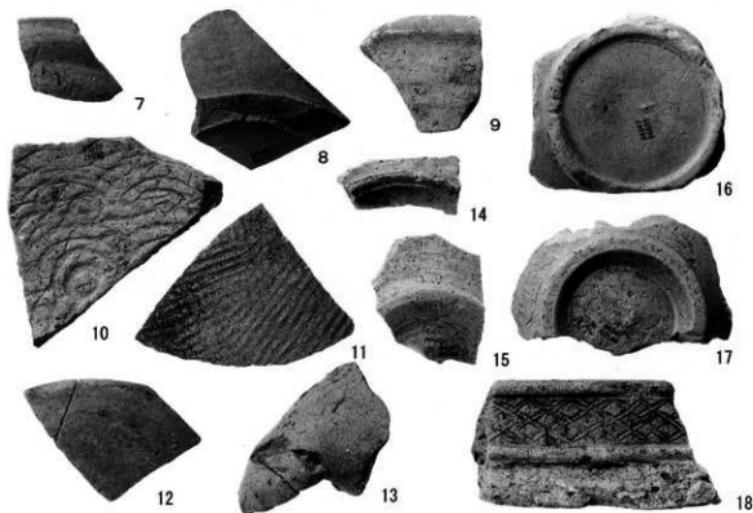


内面
土器口縁

図版 8 出土土器



弥生土器・土師器・須恵器



土師器・須恵器・瓦質土器・陶器

報告書抄録

ふりがな	あいいせき・あいじょうあと はくつちょうさがいよう						
書名	安威遺跡・安威城跡発掘調査概要						
副書名	主要地方道茨木龜岡線道路整備工事に伴う調査						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	一瀬和夫・藤井信之・富田卓見・細川晋太郎						
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課						
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL. 06-6941-0351						
発行年月日	2006年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯	東經	調査期間	調査 面積	調査原因
安威	茨木市東安威	27221	74	34°50'38"	135°34'12"	2004年11月29日	道路整備 工事
安威城跡			45	34°50'52"	135°34'12"	2005年3月31日	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安威	城跡 集落	弥生時代 古墳時代 古代 中世	弥生：溝 古代：溝、落ち込み 土坑 中世：溝、落ち込み	弥生：土器 古墳：土師器、須恵器 古代：土師器、須恵器 中世：土師器、瓦器、陶磁器	庄内期を中心とする南北600m以上の遺構・遺物の分布。 古墳時代中期の堅穴住居群の北限の確認。
安威城跡	集落	弥生時代 古墳時代 古代 中世	弥生：溝、ビット、 土坑 古墳：溝、落ち込み、 土坑 古代：溝、ビット、 中世：溝、落ち込み	弥生：土器 古墳：土師器、須恵器 古代：土師器、須恵器 中世：土師器	

安威遺跡・安威城跡発掘調査概要

主要地方道茨木龜岡線道路整備工事に伴う調査

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目 Tel.06-6941-0351

発行日 2006年3月31日

印刷 株式会社中島弘文堂印刷所

